台大日本語文研究第 11 期
2006 年 6 月，頁 55-90
本文 2006.4.28 收稿, 2006.6.1 通過刊登

考察分析多義語的各種理論
-以分析動詞「つける」的多義性為中心-

謝豐地正枝*

摘要

本論文分爲兩個部分。第一個部分是關於分析多義語所表現的多種語義概念時，所面臨到理論性上的諸問題，並對此加以闡明。也就是藉由考察後，明確指出多義語在衍生出多種語義的過程中，是和什麼樣的理論性組織結構有關，且是以什麼樣的網絡模式，來統括衍生出的多種語義概念。

第二部分則是以動詞「つける」爲例子，認定「つける」的原型後，確定藉由此原型而形成的基本義。並且闡明從基本義衍生出多種語義的意義延伸過程，再加以考察、分析從基本義衍生出的多種語義間意思上的相互關係，並用圖表示多種語義的網絡模式。

關鍵詞：圖示、原型、網絡模式、意義的延伸、隱喻

* 臺灣大學日本語文學系教授

An Analysis of Expansion Process of Polysemic Meanings Indicated by a Japanese Verb「tsukeru」and Theories Supporting Its Expansion Process

HSIEH Masae Toyochi*

Abstract

This paper contains mainly two parts: The first part points out the problems we face when we analyze how a polysemic word transfers its fundamental meaning to diversified polysemic meanings. Upon making a comparative study among three major theories,（1）schematic theory advocated by Langacher, （2）prototype theory advocated by Geroge Lakoff and others, and （3）phenomenal element theory advocated by Kunihiro, the paper determines what types of cognitive linguistic theories would support for polysemic words in transferring fundamental meaning to the diversified meanings.

The second part of the paper analyzes how a Japanese verb called “tsukeru”transfers to diversified meanings from its fundamental meaning. The paper examines the actual application of types of metaphorical relationship supporting each case of changes in meanings. These metaphorical relationships include synecdochic transfer, metaphoric transfer, metonymic transfer, partial transfer, etc.

The paper examines what type of theory and metaphorical relationship are applied for creating a new meaning. In conclusion, this analysis formulates the schematic net-work model chart showing the

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

process of transfers from the fundamental meaning to the diversified polysemic meanings as well as the complicated inter-relationship existing among the fundamental meaning of “tsukeru”and all other newly created polysemic meanings.

Key words: schema, prototype, network-model, transfer of meaning, metaphor

語の多義性の分析に関わる諸理論に対する考察
—動詞「つける」の表す多義性の意味分析を中心に—

謝豊地正枝*

要旨

本論文は二つの部分によって構成される。第一に、多義語の表す複数の多義的な意味概念を分析する際に直面する理論的な諸問題に関して明らかにする。すなわち、多義語が複数の多義的別義を派生させるプロセスには、どのような理論的なメカニズムが関わっているのか、そして、派生した複数の意味概念を統括するネットワーク・モデルとはどのようなものであるか、について考察した上で明らかに指摘する。

第二の部分は、動詞「つける」を例に取り上げて、「つける」のプロトタイプを認定して、そのプロトタイプによって形成される基本義を確定する。そして、基本義から複数の多義的別義への意味的な拡張のプロセスを明らかにして、基本義から派生した複数の意味の間に存在する意味的な相互関係に対して分析・考察をして解明した上で、それらの複数の多義的別義のネットワーク・モデルを図示する。

キーワード：スキーマ、プロトタイプ、ネットワーク・モデル、
意味的拡張、メタファー

* 台湾大学日本語学科教授

語の多義性の分析に関わる諸理論に対する考察
—動詞「つける」の表す多義性の意味分析を中心に—

謝豐地正枝

1 本稿のテーマと目的

最近、台湾でも語の多義性に関する論文の発表が増加しつつある。この傾向は喜ばしいことではあるが、ある語の基本義がどのように意味的に拡張して複数の多義的な意味を派生させるか、そして、その意味拡張にはどのような理論が関わっているか、また、派生した複数の多義的な意味はどのように相互関連しているか、並びに、その相互に関連していて一つのまとまりを見せる意味的な範囲をどのような理論に依拠して設定するか、などの理論的な背景に関わる諸問題に関しては、必ずしも明確には把握されていないまま書かれた論文も多く見受けられる。そこで、本稿は、第一に、語の多義性を研究する場合に直面するこれらの諸問題を解明すること、そして、第二に、多義語が複数の意味を表す場合には、どの範囲までが意味的に相互関連しているかを効果的に判断するための判断基準と方法に関して考察することを明らかにする。そして、その結果を踏まえて、第三に、動詞「つける」の表す多義性を分析すること、の三つのテーマについて解明することを目的としている。

2 語の示す多義性の分析に関わる理論的な背景に対する考察

2.1 スキーマ論に対する考察

すべての語は基本的には多義であると言われている。語が基本義から意味的に拡張して多義性を示す場合、それらの異なる意味を示す多義的な意味をまとめる「網のような範囲」を認知言語学用語では複数の意味を統括する「ネットワーク・モデル」と呼ぶ。このネットワーク・モデルに関わる基本的な理論には、二つの理論がある。一つは、ラネカー（Langacker）によって唱えられたスキーマ論

であり、もう一つは、レイコフ他によって唱えられたプロトタイプ論である。

第一に、スキーマ基本論を考察するに当たって、「スキーマ」という用語について考える。「スキーマ」に対する定義は今日に至ってもはっきりと確立されているわけではない。「スキーマ」という語を最初に提起したのは、ドイツの哲学者カントである。カントは「スキーマ」とは、「人が抱いたイメージを造成している構造であり、命題とは関係がないもの」と捉えた。[1]　今日に至るまでこのもともとの定義にさまざまな解釈が加えられてきた。例えば、ソーンダイク（Thorndyke）は、

> ...a cluster of knowledge representing a particular generic procedure,object, percept, event, sequence of events, or social situation.
>
> 日本語訳：（スキーマとは）知識の集団であり、それはある特殊な行動・状態・事情などの進行状態、主体が目的とするものとか知覚の対象、ある出来事や出来事の因果的連鎖、社会的状況、などを表現するものである。

と定義した。[2]　そして、この知識の集団は、表現の対象をなしているもの或いは出来事や状況、などが、事例を挙げて裏付けられることができる概念であれば、その概念を支える骨組みを構築している構造そのものであると結論づける。ルンメルハート（Rumelhart）は、基本的な知識の構造を表す「スクリプト化された活動」[3]　というシャンク（Schank）及びアベルソン（Abelson）による考えを引用しながら、上記のソーンダイク（Thorndyke）が主張したスキーマの定義

---

[1] Mark Johnson,*The Body in the Mind—The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason,*1987, University of Chicago Press, Chicago, p.19.

[2] Perry W. Thorndyke, “Applications of Schema Theory in Cognitive Research,” in John Anderson and Stephen Kosslyn(eds.) *Tutorials in Learning and Memory: Essays in Honor of Gordon Bower,* 1984, W.H.Freeman, S.F. p.167-p.192.

[3] 「スクリプト化された行動」とは、ある目的を達成するために人間が通常取るであろうと予想される行動を脚本のように筆記して表して、個々の行動が相互に関連しながらそれぞれの行動がある目的を達成するために全体的に統括されて一種の「神経系統」的な全体像を呈することをさす。

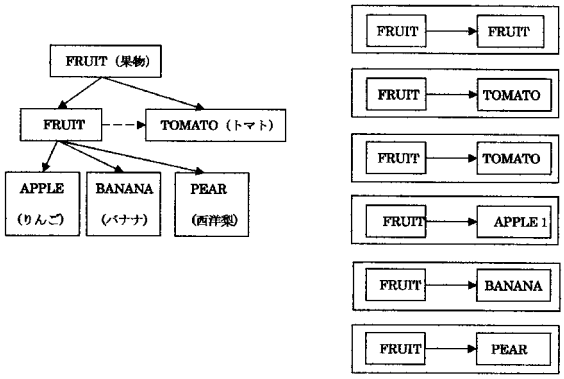
を証明した。以来、上記の定義が「スキーマ」に対する主流をなす定義として定説になっている。

関連して、認知言語学の諸理論の中でも基底をなす「スキーマ理論」について考える。現段階におけるスキーマ理論はラネカーによって提唱された。ラネカーは語に係わる関係とは、(1)(記号・文字によって表現する)音表象の領域、(2)意味的な領域、(3)音素などの音声的な領域、などの全ての領域に係わりがあると強調する。そして、語の示す多義性の領域は(2)の意味的な面に属する。そのため、いきなり複数の多義のネットーワーク・モデルを示すよりも、まず、(2)の意味的な領域における基本的な事柄、例えば、「りんご」という一種の果物は、「果物」という「類」に属しているという意味的な関係があって、「果物」という類とそれぞれの個々の「りんご」や「みかん」のような果物の種類を示すものが、「果物」という集団を形成しているが、その集団の形成には「類―種」或いは「全体―部分」という意味関係が存在する。そのように意味関係が存在すれば、スキーマによって支えられたネットワークの範囲を設定することができるのである。その際、あるものがある集団に「等価を基準として」意味づけのレベルでまとめられるプロセスを「カテゴリー化」と呼ぶ。例えば、「りんご」「バナナ」「梨」などの「種」はそれぞれが相互に異なっていることによって「区別される」が、同時に意味特徴の共通性・類似性によって、また、それぞれが「等価である」ということを基準として、「果物」という「類」に「まとめられる」ことを「カテゴリー化」されると言う。最も重要な点は、ある「類」を表す語とそれに属する「種」を表す語との間に「カテゴリー化」された関係が存在することが、ある語のスキーマに支えられたネットワークの形成に不可欠である点である。

以上の基本的なことを踏まえると、もし、ある語の基本義と意味的に拡張された複数の多義的別義との関係の範囲を示すネットワークであるならば、基本義と複数の多義的別義との間には「意味的な相互関係」が存在していなければ成り立たないことが明白であろ

う。このような多義性を示す意味的な相互関係に支えられた複数の意味を統括するネットワークについては本稿の後項にて考察するので、ここでは、最も基本的な語のカテゴリー化された意味関係を示すスキーマを図示する。

〔図１〕ラネカー によるスキーマで示されたカテゴリー化を示す図[4]

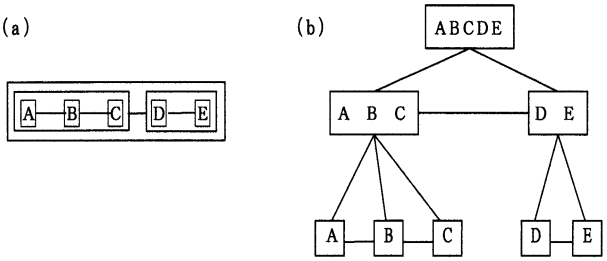


「図１]の表示について説明すれば、意味的な「スキーマ関係は実線の矢印で、意味的な「拡張関係（(多義性の場合)」・「変化（語の場合)」は破線の矢印によって示されることである。

次に、ある言語要素の連なりが構造を持っているものの場合は、語のカテゴリー化を表現するスキーマよりも複雑さが加わる。そして、統語関係を表す構造は係わってくる要素が多ければ多いほど、その構造は大きく拡張していく。この場合の基本的なスキーマのタイプとしては二種類あって、一つはコンパクトなタイプであり、もう一つは爆発的なイメージを読み手に与える釣鐘状を呈するタイプである。例えば、ABCD という言語要素が連なっていてそれらの言語要素の連なりがある種の構造を持っている場合には、コンパクトなタイプを（ａ）のスキーマによって、後者を（ｂ）のスキーマによって表す。

[4] Ronald W. Langacker、 *Foundations of Cognitive Grammar: Vol. I Theoretical Prerequisites*、1987, Stanford University Press, Ca, p.74.

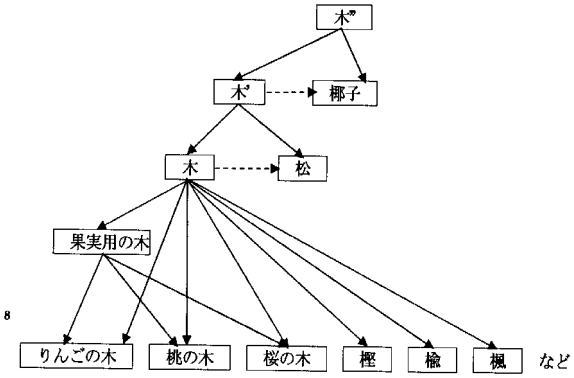
〔図２〕言語要素の連なりが一つの構造を示す場合のスキーマ[5]



〔図２〕の（ｂ）の場合、個々のＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅという言語要素は下位の第三レベルにおいて示される。そして、Ａ・Ｂ・Ｃは意味的に、あるいは、音表象的に、または、音素的に、相互に関連性を保ちながら、一緒にＡＢＣを含む一つの言語要素を形成する。同時にＤ・Ｅ、も同じようなプロセスによってＤ・Ｅを含む一つの言語要素を形成する。下位の第二レベルにおいては、それらの形成された二つの言語要素が互いに相互関連性を保ちながら一緒に、ＡＢＣＤＥを含む一つの語を形成するが、この形成された語を概念的には「上位レベル」に位置するものと見なして、語を形成するまでのそれぞれの段階を概念的には「下位レベル」に位置するものと見なす。そして、それぞれの下位レベルと上位レベルの間の相互関連性をスキーマで表すのである。語の基本義から多義的別義への拡張を示すスキーマを統括した、全体像を表すネットワークが[図２]よりもより複雑になるのは必然的なことであろう。例えば、「木」と「果実用の木」との意味的な関係を例に取り上げて、スキーマを用いたタクソノミーとして図示すれば、「図３」のようになる。[6]

[5] Ronald W. Langacker “*op.cit*,” 1987, p.75.
[6] タクソノミー（taxonomy）とは、階層構造のことを指す。すなわち、あるカテゴリーは「基本レベル（basic level）」より上位の概念を表すカテゴリーとそれより下位の概念を表すカテゴリーと関連づけられて、タクソノミーと呼ばれる階層構造を作るのである。

〔図 3〕ラネカーによるスキーマによって表された「木」のタクソノミー[7]



〔図３〕について考察する。ラネカーは上記の図に表記されている「木」とは「木のプロトタイプ」であると指摘する。そして、通常の「木」と比べて多少異なるもの、言い換えれば、意味的には「木」の類にまとめられているものの多少変わっている木として、例えば、「松」が「プロトタイプ」である木のカテゴリーからはずされる。〔「木」----▶「松」〕と表される破線は、「松」は通常の「木」とは多少違う木であると見なされるから、この意味的な基本レベルからはずすという意味を指す。また「木'」で表示されるカテゴリーには「松」よりも更に変わっている木、例えば、「椰子」が分類される。そして、プロトタイプの「木」は通常の木とその下位レベルのカテゴリーとしての果実用の木とに分けられる。したがって、果実用の木は同時に通常の木のカテゴリーにも二重にまとめられていることが分かる。

[7] Ronald W. Langacker "*op.cit*," 1987, p.383.

[8] 「桜の木」には「さくらんぼ」を結ぶ果実用の木と、「さくらんぼ」を結ばない観賞用の木があるため、「木」のカテゴリー、およびその下位レベルに位置する「果実用の木」のサブ・カテゴリーの二つのカテゴリーとを直線によって結んでそれらの目的があることを表す。「桃の木」には観賞を目的とすると同時に果実を収穫する目的とがあるために、「桜の木」と同じように二つのカテゴリーとに直線によって結んでそれらの目的を表す。

このラネカーによる[図 3]は、「木」を「ある一つの集団全体」と見なして、その「木」の類に属している個々の木の種類を「部分」と見なす。したがって、〔図３〕は、「全体―部分」という包摂の意味関係によって支えられている「シネクドキ（提喩）」を基にして拡張した多義的別義が存在する場合の、基本義と多義的別義の間に存在する意味関係を示すタキソノミーに類似していることが分かる。ただし、「シネクドキ」の意味関係に基づいて意味的に拡張している複数の多義性を示す意味的な相互関係を示すネットーワーク・モデル図には、「図３」に見出されるような「木'」や「木"」を、プロトタイプである「木」とは異なるレベルの言語要素であるとは表示しない。また、「松」が通常の「木」とは多少違うものであると分類されたり、「椰子」が「木'」と分類されたりすることはない。「シネクドキ」の意味関係に基づいて意味的に拡張している複数の多義性を示す意味的な相互関係を示すネットワーク・モデル図には、「松」或いは「椰子」を表現するために「木」を用いて表現する例があった場合に、言い換えれば、「木」を用いて「松」の意味を指示している場合に、例えば、「多義的別義－２」或いは、「多義的別義－３」のように表示する。下記を見られたい。

（1）〔生け花の展覧会場で〕

A「松を主体にしたこの作品は、副体の枝が右に張り出している。」

B「そうね。副体としては長過ぎるわね。」

A「全体的に木のウェイトがちょっと重いね。花が少ないし。」

B「やっぱり、あの副体の木の枝が長過ぎるからね。」

において、B の最後の会話の「木」が「松」の意味を表している。この場合に、通常の「木」の意味から「松」へと意味的に拡張していることになる。そして、この意味的な拡張は「木（全体）― 松（部分）」という意味関係に支えられるシネクドキに基づいている。したがって、この場合は、「木」が基本義から意味的に拡張して「松」

という多義の意味を指示するのであるから、「多義的別義―２」と表示するのである。この視点に基づけば、ラネカーによる〔図３〕はある「類」を示す語とその語に属する「種」とをスキーマで表したものであって、「その語の多義性を表示したものではない」ことが明白であろう。但し、語の多義性を分析する際に基本義から意味的に拡張して派生した複数の多義的別義と基本義との意味的な相互関係に関して、スキーマを用いて統括された全体像をネットーワーク・モデル図で示すことが可能なのである。

2.2 プロトタイプ論に対する考察

前項において、言語要素のある連なりが一つの構造を示す場合に、スキーマによって図示するができる点を指摘したが、その際に、語のプロトタイプを中心に意味的な関係が拡張する様が見出された。この点において、語の多義性を統括的に示すネットワークにはスキーマ論に加えてプロトタイプ論が関係していることが分かる。そこで、この項では、プロトタイプ論について簡単に考察しておきたい。

プロトタイプ（prototype）とは、意味的な面において、ある語のカテゴリーに属していて、同時にその語の意味特徴を表示している意味構造を構成する成員のうちで、そのカテゴリーに属する最も顕著でふさわしいと判断される構成成員をさす。プロトタイプと見なされる構成成員はそのカテゴリーの代表的な成員なのである。例えば、英語文化圏では“果物”のプロトタイプと言えば、‘りんご’や‘オレンジ’がプロトタイプであり、“野菜”のプロトタイプと言えば、‘人参’であり、‘トマト’のようなものは、どちらのカテゴリーでもプロトタイプからは離れたところに位置づけられている。[9]

プロトタイプ論に基づいて多義語の表現する複数の多義的別義を分析する場合の問題点は、どのような構成成員をそのカテゴリーの

[9] ジョージ・レイコフ（George Lakoff）著、池上嘉彦・河上誓作・他訳『認知意味論――言語から見た人間の心（原典は *Women,Fire, Dangerous Things*）』1987 年、紀伊国屋書店、ｐ.752。

プロトタイプであるかについて認定する方法にあろう。レイコフが断っているように、プロトタイプとは、ある社会で話されている言語と文化を反映するものであるから、社会及びその社会に住む人々の言語や文化が変化すれば、同じ語の最も顕著でふさわしい構成成員であるプロトタイプは必然的に変化する。例えば、“果物”のカテゴリーを例に取って考えれば、台湾は‘りんご’を生産するには適した気候条件下にはなく、半熱帯的な気候条件下にあるために、「“果物”と聞いて、すぐ頭に思い浮かべる果物は何ですか。」という質問を用いたアンケート調査をすれば、‘バナナ’や‘パイナップル’や‘パパイヤ’や‘マンゴー’という熱帯的な果物がプロトタイプとして回答される率が高いであろう。また、日本でそのような調査をすれば、‘りんご’や‘みかん’や‘柿’や‘ぶどう’などが高い率を占めることが予測できよう。

関連して、ある語の多義性を分析する場合にも、当然、同じ問題が起こってくる。筆者の語の多義性に対する分析研究の積み重ねに基づいて判断すれば、名詞の方が動詞よりもその社会の文化的背景の影響をより多く受けやすいと考えられる。ある語を構成する中心的な核を成すプロトタイプを認定するには、その社会で話されている言語や文化的背景を考慮に入れねばならないから、その考慮の度合いという視点から推測すると、ある名詞の指示する概念を構成する意味特徴のうち、どの構成成員をプロトタイプと認定するかというプロセスにはアンケート調査の実施が不可欠である。これに対して、動詞の場合はどの社会でどんな言語で話されていようとも、人間がある目的を達成するための動作を表現する動詞の概念を支えている主な意味特徴を表す構成要素には基本的には大きな差は見出されにくい。

この点についてもう少し考えると、実際に実施されたアンケート調査によれば、「砂漠」という語を聞いた時に、日本人は＜幻想的だ＞＜ロマンチックだ＞＜エキゾチックだ＞＜乾燥地帯だ＞＜駱駝で旅行する＞などの意味特徴を思い浮かべて回答した。これに対し

て、実際に「砂漠」が国の一部を成しており、「砂漠」も人々の生活圏・貿易圏に組み込まれている地域に住んでいるアラビア人にとっては、「砂漠」という語を聞いてすぐ思い浮かべた意味特徴とは、＜危険だ＞＜毒蛇が多い＞＜水が貴重だ＞＜砂塵が舞う＞＜オアシスが天国だ＞などであったという。「砂漠」が表す概念を日本人は遠くから感覚的に捉えているのに対して、現地で「砂漠」と共存して生活するのを余儀なくされるアラブ人は、砂漠から人が直接的に受ける恐怖心や肉体的な苦痛などの経験・体験が上記の意味特徴を選択した基底になっていることが分かる。言い換えれば、名詞である「砂漠」の表す概念は、異なる社会における人間の異なる経験・体験を基にした文化的な背景・要素や地理的・気候的な要素を受けやすいということが推論できよう。

それでは、動詞はどうであろうか。例えば、日本語の「打つ」と中国語の「打」と英語の「hit」の間では、それぞれの言語におけるこれらの語の概念を支える基本義にはあまり差がない。例えば、日本語の「打つ」の基本義としては、＜ある目的を達成するために＞＜動作主体があるものを別のものや工具を用いて＞＜瞬間的に強く接触させて衝撃を与える一回性の動作のこと＞という意味特徴がプロトタイプとして考えられる。中国語の「打」と英語の「hit」の概念を支える中心的なプロトタイプとして、前記の日本語のプロトタイプと同じ意味特徴を認定してもさしつかえないであろう。動詞の多義性の分析に関しては、それぞれの語の表す概念を構成するプロトタイプは同じだとしても、基本義から多義的別義へと意味的に拡張するレベルにおいて、それぞれの言語が話される社会の文化的な背景の差に基づいて、使い分けや表現上の差異や意味的なぶれ、などが見出せるのである。[10]

関連して、認知言語学的な視点から、プロトタイプの特質について考える。すでに前述したように、カテゴリーがプロトタイプ的な

[10] 謝豊地正枝「中国語における「打」と日本語における「打つ」の表す多義性に対する意味論的比較研究」語彙研究学会において配布したハンド・アウト資料、日本愛知学院大学における語彙研究発表会、2005 年、10 月。

構成成員を中心として形成されているという特質に加えて、それが段階的なものであることも特質の一つであろう。色のような対象そのものに連続性があるものも存在するが、そのように対象の持つ特徴や性格に基づいて段階があるケースは稀である。ほとんどのケースがそのような対象の持つ性格に由来すると言うよりは、それを捉える人間が生み出すものであるという立場に立っており、これをプロトタイプ効果（prototype effect）と呼ぶ。これは言語活動が人間の主体的な営みに係っていることを示していることに外ならない。しかし、この点でも問題がないわけではない。それは、なぜアンケート調査に回答する被験者である人間が、あるカテゴリーに属する「あるもの」、例えば、「色」のカテゴリーであるなら「赤」、「果物」のカテゴリーであるなら「りんご」を、あるいは、ある語が表す概念を構成する意味特徴、例えば、「花」であるなら「植物が咲かせる人目を引く美しいもの」を、中心的なものであると「区別して」「選択したか」という点である。この問題は人間の知覚の仕組みにも関わるレベルのものである。前述した「砂漠」に対する捉え方に日本とアラビアという異なる二つの社会に住む人間の間で大きな差異が見出せることを鑑みれば、この人間の知覚の仕組みに関わる問題を解析するには、でき得る限りの複合的な要因を考察の対象にしなければならないであろうと推察されるのである。

2.3 現象素に基づく認知的多義に対する考察

スキーマ論、プロトタイプ論に加えて、国広論文による「現象素に基づく認知的多義」論がある。[11] その「現象素に基づく認知的多義」論では、「現象素」とは、ある語が指す外界の物、動き、属性などで、人間の五感で直接とらえて、人間が認知したものであると主張する。そして、「認知的多義」とは、前記の現象素の認知のしかたの違いが主な原因で生じる多義であると指摘する。この「現象素の認知のしかたの違い」とは、「現象素をいろいろの角度から捉えた

[11] 国広哲弥「語義研究の問題点―多義語を中心として」、『日本語学』５－９：p.4－p.12、1986、明治書院、「認知的多義論－現象素の提唱」、『言語研究』106：p.22－p.44、1994、日本言語学会。

り、焦点をしぼったりすること」を指すのである。[12]

国広による「現象素に基づく認知的多義」論は、「多面的多義」の存在を強調する。これは、どの意味的概念にも常に他の意味概念をさすものが表裏一体のように存在しているという意味である。そして、ある多義語が表し得る複数の意味のうち、話し手によってある一つが選択されて具現化された場合には、他の意味概念は話し手によって全く意識されず抑圧されていると想定される点を指摘する。この点について、レイコフもある多義語を用いる時に、話し手は有契性によって複数の意味概念の中からある概念を「主観的に選択して」言語によって具現化させるのだと見なす。籾山説では、「多義語は複数の意味概念を表現できるが、その内のある一つの意味を具現化させる場合には、話し手がその意味を主観的に選択して具現化するのではなくて、話し手がその一つの意味概念に「限定する」からだ」と見なす。[13] ラネカーは多義語の表す意味概念によって形成されるネットワークに属する意味概念のうち「ある一つの意味概念が活性化されると、カテゴリー化関係によってその意味と結びついている他の意味が二次的に活性化される傾向がある」と考える。[14] このように、話し手がどのような思惟作用・心理的作用によって複数の意味概念のうちから一つの意味だけを具現化させるのか、そして、その際に、他の意味概念は「圧迫されていて表面化しない」のか、「休んでいる」のか「二次的に活性化される傾向を見せながら非活性化されている」のか、などという視点の違いから発生する様々な見方があって未だ確立されているわけではない。多義語に対する意味分析をする際に直面する問題の一つとして、上記の点における

[12] 国広哲也『理想の国語辞典』1997 年、大修館書店、p.226。
[13] 1998 年 10 月に、名古屋大学における筆者の指導教授であった籾山洋介助教授に論文指導を受けていた時、筆者が「レイコフが彼の著『認知意味論』の中で、話し手は多義語の表す複数の意味の中から、一つの意味概念を主観的に選択して具現化する」という見方をしていると指摘した際に、「「選択する」のではなくて、「限定する」、あるいは、「制限する」、という言葉の方がふさわしいと思う」との注意を受けた。
[14] R.W. Langacher, “A View of Linguistic Semantics,” in Bryguda Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*、in 1988, Amsterdam: John Benjamins、p. 49－p.90.

統一的見解の不存在があるのである。

2.4 多義語の複数の意味を統括するネットワーク・モデルに対する考察

籾山論文は形容詞「かたい」を例に取り上げて、ラネカーのネットワーク・モデルと国広説による「現象素に基づく認知的多義を統合したモデル」を統合したネットワーク・モデルを提唱した。

籾山論文は「かたい」の概念を支えるプロトタイプとして、下記の文例を示して、＜単一の固体に関して＞＜外部から加えられる＞＜力に対して＞＜抵抗感を感じさせる＞＜さま＞であると認定した。下記の（2）から（6）までの文例は籾山論文からの引用である。[15]

（2）ダイヤモンドはかたい。

（3）この肉はかたい。

そして、多義的別義の意味 2 の表示する概念を支える意味特徴として、＜複数の密着したものに関して＞＜引き離さそうとする＞＜力に対して＞＜抵抗感を感じさせる＞＜さま＞を上げる。

（4）びんの栓がかたい。

（5）口をかたく閉じる。

において、意味 1 と意味 2 を支える意味特徴の間には＜（加えられる何らかの）力に対して＞＜抵抗感を感じさせる＞＜さま＞という共通点が見出され、これによって意味 1 から意味 2 へと意味的に拡張した背景にはこれらの二つの意味がメタファーの関係にあるからである。

また、多義的別義の意味 3 の概念を支える意味特徴として、＜人間が精神的に緊張した状態にあるさま＞を指摘する。

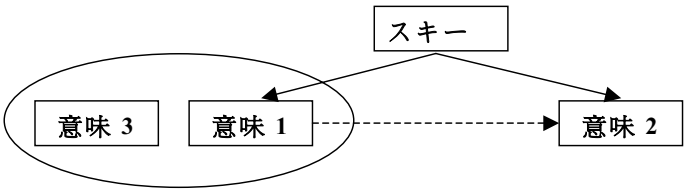
（6）面接試験でかたくなってしまった。

において、「通常、精神的に緊張している時は、肉体的に筋肉などがカタクなる」ということが生じるので、二つの出来事が同時に生じ

[15] 籾山洋介著「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」、山梨正明編『認知言語学論考』2001 年、ひつじ書房、p.52－p.56。

るというメトニミーの意味的関係が成り立つ。「かたい」の概念を支持する意味関係を分析した結果、籾山論文は「かたい」の概念を支持する意味構造の中心を成すプロトタイプをスキーマで表して、その概念が如何に意味的に拡張するか、また、拡張した意味がそれぞれどのような相互関係を示すかについて、統合的なネットワーク・モデルとして図示した。

[図４]　籾山説による「かたい」の多義性を表示する統合的ネットワーク・モデル[16]



「図４」について説明すると、スキーマとは＜（加えられる何らかの）力に対して＞＜抵抗感を感じさせる＞＜さま＞という意味特徴によって構成される意味構造をもつが、このスキーマはネットワーク全体を覆うスーパースキーマではない。国広説による「現象素」は楕円形によって示されるが、これはプロトタイプである意味 1 と意味 3 を含む。スキーマと意味 1 とは意味的な包摂関係に基づいたシネクドキの関係にある。意味 1 と意味 2 は意味的な類似性に基づいたメタファーの関係にある。さらに、意味 1 と意味 2 は「全体―部分」という意味関係に基づいたメトニミーの関係にある。したがって、「かたい」の多義的な意味的拡張には、シネクドキ（提喩）、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）の三種類の比喩の意味的関係が係っていることが分かる。ポイントは、籾山論文によるネットワーク・モデルを用いた場合に、この場合のようにメトニミーの意

[16] 籾山洋介「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考―*Studies in Cognitive Linguistics－No.1*』山梨正明他編、2001 年、ひつじ書房、p.52－p.54。

味関係を示す＜精神的に緊張した状態＞と＜肉体的なカタサ＞の両方を含む全体を設定することを可能にする点である。また、国広説による「現象素」のうち「肉体面」と「精神面」のどちらに焦点を絞るかによって、意味 1 あるいは意味 3 が成り立つことになる点を示すことができる点もあることを見逃すことはできない。

２．５多義語の複数の意味への意味的な拡張を支える諸要素に対する考察

2.4 **項において籾山論文による多義語の複数の意味を統括**するネットワーク・モデルに対して考察した際に、（1）シネクドキ転用（synecdochic transfer）、（2）メタファー転用（metaphoric transfer）、（3）メトニミー転用（metonymic transfer）、などの意味的転用が、基本義から多義的別義への意味拡張を支える意味関係の基を成す点を指摘した。これらの三種類の意味的な転用は「比喩的転用」のカテゴリーに属していて、多義語の複数への意味拡張を支える主流的な意味関係である。しかしながら、多義語の意味的拡張を支える理論的な背景には、上記のシネクドキ転用、メタファー転用、メトニミー転用以外のものも存在する。それらには、（4）心的視点の相違によるもの、（5）転移、（6）部分転用、（7）推論的意味、（8）具象化転用、（9）上下関係的意味、（10）特殊化転用、（11）集合化、などがある。[17]　例えば、（5）転移とは、例えば、「いい」の表示する多義性の内、

（7）あの選手はいい足をしている。

における「いい」の表示する意味的な拡張は、「強い足を持っていて逞しい」という肉体的な面を意味しているが、焦点は「速く走る力」という機能に置かれているので、「意味的に転移している」という表現法を指す。この場合、焦点は機能的な面に合わされているのみで、他の部分は焦点からはずれるが、抑圧はされていない。これに対して、（6）部分転用とは、ある語が表示する語義の特徴のうちの一部のみが用いられて、他の意味特徴は抑圧されている場合を指す。

[17] 国広哲也『意味論の方法』1992 年、大修館書店、p.111－p.128。

（8）北投の低い山を散歩していたら、蝉の声が降り続いた。

において、「降る」の概念は＜雨・雪・あられ小片が＞＜空から（頭上から広範囲に渡って）＞＜落下する＞という意味特徴によって形成されている。[18]　そのため、「蝉の声が広範囲にわたって響き渡る」という部分的転用によって意味的な拡張が起こったケースである。また、（7）推論的意味とは、ある動作・行為が成り立つために、言語によって具現化されない部分を推論で補って意味的な拡張を支える場合である。[19]　関連して、（8）具象化転用（reification）とは、性質、抽象概念、動きなどをさす語が具体的な物を指すようになった場合を指す。具象化に対しては、「抽象化の転用が考えられる」と国広説は指摘する。また、（10）特殊化転用とは、ある特殊な場面では簡略化した表現でも話し手の伝えたい意味を聞き手に十分に了解させられる事柄を指す場合である。

3.0 動詞「つける」の表示する多義性に対する意味分析

この項では、「つける」が示す多義性に対して分析する。「つける」の表示する基本義が、その基本義から多義的別義へと拡張する際に、どのような意味的な関係を基にして意味的に拡張するかについて分析・考察して明らかにする。「つける」の基本義と、その基本義から意味的に拡張して新たに派生する多義的別義が「全体―部分」という意味関係を基に意味的に拡張している場合には、その「全体―部分」によって構成される意味関係には「シネクドキ」と「メトニミー」の二種類がある。そのため、第３・１項において、その意味的な拡張が、「シネクドキ」と呼ばれる意味関係を基に意味的に拡張したものか、或いは、「メトニミー」と呼ばれる意味関係を基に拡張したものかについて判断する時の理論的な面について明らかにする。次に、第３・２項においては、プロトタイプの認定に対して考

[18] 柴田武他編著『ことばの意味――辞書にかいてないこと』1976 年、平凡社選書、p.239。
[19] Eugene Naida, *Componental Analysis of Meaning: An Introduction to Semantic Structure*, 1975, Mouton & Company N.V., Publishers, The Hague, p.38.（日本語訳『意味の構造：成分分析』1977 年、研究社。）

察する。関連して、３・３項において「つける」の概念に最も近い「貼る」の概念との間に見出される差異について考察した上で、「つける」のプロトタイプを明確化する。そのような手順を経た上で、３・４項において「つける」の表示する概念の多義性を分析・考察して、その意味的な拡張のメカニズムのベースになる原因、及び、拡張の「プロセス」について明確化する。

３．１「全体―部分」を表す意味関係が「シネクドキ」か、或いは「メトニミー」かを判断するための判断基準に対する考察

ある語の基本義から意味的な拡張によって新たな多義的別義が派生した原因が多種類あることは既に第２・５項において述べた。ここで、問題として提起する意味関係には、（1）シネクドキ転用（synecdochic transfer）、（2）メトニミー転用（metonymic transfer）の二つ共が、「全体―部分」という意味関係を表すために、「つける」の概念が表示する基本義からさらに意味的に拡張して多義的別義を派生させる場合、「シネクドキ」を支える意味関係を基にして派生したものか、或いは、「メトニミー」を支える意味関係を基にして派生したものかに関する判断の基準を明確に把握する必要がある。例えば、シネクドキ表現の例として下記を見られたい。

（9）魚は鯛がおいしい。

においては、「全体」を表しているのは「魚」という「種」であり、「部分」を表すのは、魚という「種」に意味的に包摂されている「鯛」という「類」である。また、別の例の場合には、「部分」が「全体」をシネクドキを表すこともある。このような人間の思惟作用によって「カテゴリー化」されている関係である「部分」が「全体」の包摂されている意味関係を形成しているものをシネクドキ（提喩）と呼ぶ。そのため、ある語の意味的な拡張が「全体―部分」という包摂の意味関係によって支えられている場合に、シネクドキを基にして拡張した多義的別義だと考えられる場合がある。シネクドキ表現を支える意味関係には、「全体―部分」を形成する意味関係の一種類

しかない。但し、「全体―部分」の意味関係にも、(1)「全体」で「部分」を表すものと、(2)「部分」で「全体」を表すもの、の違いはある。

しかしながら、「つける」という概念が示す基本義から派生した多義的別義が「全体―部分」という意味関係に基づいて派生した場合には、上記の「シネクドキ」の示す意味関係を基にして拡張した場合の外に、メトニミー（換喩）を基にして拡張した場合もある。メトニミー表現の例として、下記を見られたい。

（10）私の前をだらりの帯が笑い声を立てながら歩いている。

において、「部分」とは「だらりの帯」であり、「全体」とは「そのだらりの帯を締めている舞妓さん」である。「ある全体（舞妓さん）」を、「ある部分（だらりの帯）」によって意味関係が成り立っており、この場合はメトニミーである。

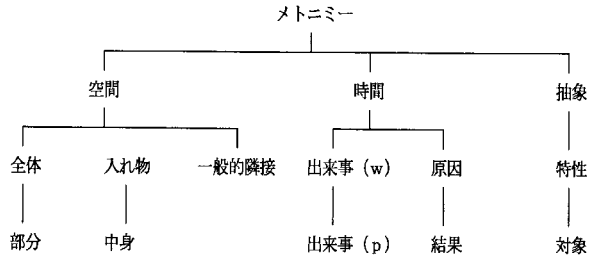
次に、ある語の基本義と派生した新しい多義的別義とが「全体―部分」を表す意味関係を表示する場合、その意味的な拡張は、一体、「シネクドキ」か、或いは、「メトニミー」か、どちらの表示する意味関係を基に意味的に拡張したのか、について判断する際の判断基準について考察したい。ある概念が示す基本義から、派生した新たな多義的別義が「全体―部分」を表す場合に、「シネクドキ」を基に意味的に拡張したのか、或いは、「メトニミー」を基にして意味的に拡張したのか、のどちらかについて判断するには、まず、判断の対象になっている「あるもの」が「別のあるもの」を意味的に包摂しているか、どうか、を判断することが大切である。そして、その包摂関係は、人間がカテゴリー別に分類した抽象的ものであることである点を忘れてはなるまい。そして、あるものの「全体」が「種」を示しており、それに意味的に包摂されている「全体を構成しているある部分」が、「類」であること、そして、その「類」は「全体である『種』」に属している。加えて、これらの二つの意味、すなわち、「つける」の場合であれば、「つける」の基本義と拡張した新たな多義的別義が、カテゴリーカ化された「上位レベル（種）と下位レベ

ル（類）」という関係を形成していることが見出されれば、「シネクドキ」を基にして基本義から意味的に拡張した多義的別義であると判断できよう。また、「シネクドキ」には、「部分」で以って「全体」を表す意味関係をシネクドキと判断する場合、と、それとは逆に、「全体」によって「部分」を表す意味関係をシネクドキと判断できる場合があることも付け加えておく。

これに対して、「メトニミー」が表示する意味関係には、「全体―部分」、「入れ物―中身」、「一般的隣接」、「原因―結果」、「特性―対象」、時間的な概念を表示する「ある出来事―別の出来事」など多種類ある。どのような意味関係がそれらの種類のメトニミーを形成しているかについては、巻下・瀬戸による「メトニミー」を形成する意味関係の種類を図示したものを「図５」に示す。

次に、「メトニミー」の表示する意味関係は、「シネクドキ」が表示する意味関係とどのように異なるかという点について考察する。「メトニミー」によって支えられている「全体―部分」という意味関係は、人が目で見えるある具象物が「全体」を成していて、その具象物の「ある部分」がその部分を含んでいる、ある「全体」を表すか、或いは、ある「全体」が、全体の一部を成している「ある部分」を表している意味関係である。簡単に言えば、我々が目で見える具象的なものが「全体―部分」という意味関係を表している場合には「メトニミー」であり、「種」に包摂されている「類」というカテゴリー化されていて、我々の目では見えない抽象的な意味関係を表示していれば「シネクドキ」であると判断できるのである。

「図５」巻下・瀬戸による「メトニミー」の種類 [20]



３．２動詞「つける」の概念を支えるプロトタイプの認定に対する考察

動詞「つける」は、連語的な視点から考えれば、「ふれあいの結び付き」を作ることができる動詞のグループに属する「つく」の他動詞である。この動詞のグループは、具象物に対する物理的なはたらきかけの全過程のうちから、接触の段階からその動作・行為が始まるものと考えられる。したがって、「つける」は動作主が主体的に第一対象物を第二対象物にくっつけようと決定して、実際にそのように行動することは言うまでもない。第一の対象物である何かを第二の対象物であるものに「つける」のであるから、何かをつけられる第二の対象物にとっては、動作主体による働きかけを直接受けて第一の対象物をくっつけられることになる。そのため、それまでの状態から「第一の対象物をくっつけられた」という状態へと変化が起こることが予想できよう。

（11）博愛精神を表すために、この赤い羽根を衣服の襟か胸につけて下さい。

における「つける」の表す概念は、＜（人目につくように具象物である）赤い羽根を（具象物である）衣服の目立つ箇所に接触させて＞＜一時的にでも離れない状態にくっつけること＞という意味特徴

[20] 巻下吉夫・瀬戸賢一共著、中右実編「文化と発想とレトリック」1997 年、研究社、p・123。

によって形成されるプロトタイプが中心的な核を形成する意味構造を持つ。このプロトタイプを形成する意味特徴を参考にして、「つける」の概念を支えるプロトタイプについて考えてみると、「つける」は＜（ある目的を達成するために）第一の対象を成す具象物を第二の対象を成す具象物の上にぴったりと接触させて＞＜離れない状態にくっつけること＞という意味特徴によってプロトタイプが形成されるものと考えられる。

3．3「つける」の概念と「貼る」の概念の間に見出される差異に対する考察

次に、「つける」の概念とその概念に近い「貼る」という動詞の概念の間にはどのような意味的な差異が存在するかについて考える。

（12）？封筒には十分な切手をつけてから、郵便ポストに入れて下さい。

（13）封筒には十分な切手を貼ってから、郵便ポストに入れて下さい。

における「貼る」の概念は、＜封筒に切手を接触させて＞＜粘着物を用いて封筒の平らな表面にぴったりと密着させて＞＜受取人の許に届くまでという目的を達成するまでは＞＜切手を封筒から離れない状態にくっつけること＞という意味特徴が含まれるプロトタイプが中心的となって形成される意味構造を持つと考えられる。この意味特徴を参考にすると同時に、「貼る」は「取り付けの結び付き」を表す他動詞であることも考慮に入れて、「貼る」の概念を支えるプロトタイプについて考えてみれば、＜第一の対象物を第二の対象物の平らな表面に＞＜粘着物或いは小道具を用いてぴったりと密着させて＞＜ある目的を達成するまでは密着させた二つの対象物同士が簡単に離れないようにくっつけること＞という意味特徴によって構成されるものと考えられる。

次に、「つける」の概念を支えるプロトタイプと「貼る」の概念を支えるプロトタイプとの間に存在する相似点について考察すれば、「つける」・「貼る」によって表示される概念の両方ともが、第一

対象物を第二対象物にくっつけるのは、人目につくようにするという目的があること、そして、「つける」・「貼る」という動作を終了した後は、もともとの状態から「つけた」状態、或いは、「貼った」状態へ、と変化して、一定の時間内は接触させられてくっつけられた二つの対象物がくっついて離れない状態のままで持続していく点においては、同じである。

次に、「つける」の概念と「貼る」の概念が表示する意味的な差異について考察すれば、動作の対象になる第一の対象物を第二の対象物に接触させてくっつける際の密着度の高低、及び、密着させたものが簡単に離れる状態になるかならないかの程度の強弱、の二つの点に差異が見出される。すなわち、「貼る」によって表示される概念の方が「つける」によって表示される概念よりも、第一の対象物を第二の対象物にぴったりとくっつけさす密着度が高い。それは、「貼る」の動作の方は、なんらかの粘着物あるいは画鋲のような小道具を用いて対象となる二つのものを接触させてぴったりと密着させて離れないようにくっつけさすからであろう。また、「貼る」の方は、くっつける第二の対象物の表面は平面的なものである方がその上に第一の対象物を粘着物或いは小道具類を用いて密着させてぴったりとくっつける動作をするには便利である。これに対して、「つける」の方は人間が第一の対象物に働きかけて、第二の対象物に接触させてくっつける動作をすることを表現するが、つける物が平面的であるべきだとか、上面に限るとかの制限はない。また、「つけたもの」をすぐ「とりはずす」ため、或いは、「付け替える」ためには、くっついている密着度は高くなくて接触している程度でもいい。加えて、対象になる二つのものをつけた状態が僅かな時間内でも、動作主の判断によって第一の対象物を取り外して、二つのものを簡単に離すこともできる。そして、第一の対象物を別のものの上に「付け替え」たり、或いは、つけたままの状態が長時間持続していく方がよいと動作主が判断すれば、接触させてくっつけたままにしておいても構わないのである。

これに対して、「貼る」の概念には、二つの対象物を粘着物或いは小道具類を使って一度くっつけると、「貼ったものをはがす」のはあまり容易ではないという潜在的な推理の作用が働く。加えて、「貼る」で表す動作の方はその動作の目的を達成するまでは、対象となる二つのものをくっつけた後ですぐ離れる状態にならないように一定の時間内はくっついたままの状態を保つ目的を潜在的に秘めている。そして、「ある一定の時間が経過して当初の目的を果たしたならば、貼ったものを剥がしてもいい」という、一定の時間の間に「貼った」状態を保ってこそ、初めて目的を果たすことができるという第一の前提があり、更にその目的が果たされた後は貼ったものを「剥がしても構わない」という第二の前提がある。

関連して、「貼る」に関して連語的な視点から考察すれば、「を格」の名詞で表示される第一の対象は、「貼る」という動作の働きかけをうけて変化するが、その変化はなんらかの方法で第二の対象にくっつけられる状態へと変化することを意味する。そのくっつけ方には、接触から表面への付着までを含んでいて、「貼る」の意味的な完結性を獲得するために、第二の対象を指し示す「に格」或いは「へ格」の名詞が必要である。それは、第一の対象は「を格」の名詞によって表示されるが、

その第一の対象と「貼る」との関係は、「に格」あるいは「へ格」を有する名詞である第二の対象の存在によって決定されるからである。[21]

以上の諸点から考えると、二つのものがぴったりとくっつけられた密着度の高低、及び、一定の時間内に二つのものが離れてはいけない状態下にあるか、ないか、という点、の二点に基づいて、「つける」「貼る」のどちらを用いたらいいかという使い分けの判断をすることができるであろう。下記の文例を見られたい。

（14）？劇の公演の日時や出演者を知らせるポスターを

[21] 奥田靖雄「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編鈴木重幸・鈴木康之『日本語文法・連語論（資料編）』1983年、むぎ書房、p・27。

できる限り多くの人の目に付く場所につけて下さい。

（15）劇の公演の日時や出演者を知らせるポスターをできる限り多くの人の目に付く場所に貼って下さい。

（16）口紅を唇につけたが、色がすぐはげた。

（17）？口紅を唇に貼ったが、色がすぐはげた。

３．４「つける」が表示する意味的な拡張のあり方に対する考察

３．４．１「つける」の基本義

「つける」の基本義に関しては、[3.2]項において既に分析・考察した＜（ある目的を達成するために）第一の対象を成す具象物を第二の対象を成す具象物の上にぴったりと接触させて＞＜離れない状態にくっつけること＞という意味特徴によって形成されたプロトタイプを「つける」の基本義として用いることにする。

（18）今夜のデートには、このイヤリングをつけて出掛けよう。における「つける」の概念は、＜自分を引き立たせるために自分の耳にイヤリングを密着させて＞＜離れないようにくっつけて身にまとうこと＞という意味特徴によって形成される「イヤリングを耳に密着させてくっつけて身にまとうこと」という概念を表す。この意味特徴は「つける」の基本義とほぼ同じであるが、＜身にまとう＞という意味特徴が加わっているために、意味的には基本義からわずかに拡張していることが認められる。そうであっても、基本義から意味的に拡張して別の多義的別義を形成するまでには至っていない。「二つの対象物を接触させて離れないようにぴったりとくっつけること」という基本義と「イヤリングを耳に密着して離れないようにくっつけて身にまとうこと」の間には僅かに密着度の違いがある程度であり、「つける」の基本義による意味領域内の表現であると考えられるのである。

３．４．２「つける」の多義的別義－[2]

（19）警部はその犯罪の被疑者と見られる男の後をつけた。

における「つける」の概念は、＜犯罪に係る証拠を得ようという目的の下で＞＜被疑者の後を＞＜警部がぴったりとくっついて追跡すること＞という意味特徴によって形成される「対象となる者の後にぴったりとくっついて追跡する」という概念を表す。(19)の文例における「つける」という動作は、「二つの対象物を隙間がないほどぴったりと接触させてくっつけること」という基本義から、対象となる「被疑者」と「追跡者の警部」の二人の間に物理的・空間的な距離がある「動作」へと意味的に変化している。この場合に、対象物が二人の人間へと変化して、しかも、二人の人間の間に物理的・空間的な距離があり、「動作の対象になる者の後にぴったりとくっついて別の者が追跡する」という概念へと意味的に拡張している振る舞いが見出される。そして、この意味的な拡張には、「二つのものを接触させてくっつけるという動作における物理的な空間移動」と「第一対象者の後にぴったりくっついて空間的な距離を保ちながら第二対象者が追跡することという動作における物理的な空間移動」の間に見出せる類似性によるメタファーが係っている。

３．４．３「つける」の多義的別義－[3]

（20）母は店の売り上げの帳簿をつけてから寝るのが習慣だ。

における「つける」の概念は、＜売り上げの明細を分かりやすく記しておくために＞＜売上高を帳簿に書き入れて記録として残すこと＞という意味特徴によって表現される「書き入れて記録として残す」という概念を指すものと考えられる。この概念を支える意味特徴と、「つける」の基本義を支えるプロトタイプとを比較すると、第一の対象物が「具象的な物体」から「墨あるいはインキを用いて筆記物で記される数字・文字」という抽象的な記号に変わった点が見出される。そして、それを、第二の対象物である「帳簿」に「接触させて売上高の印として帳簿に書き入れて記録として残すこと」という概念へと意味的に拡張している。「つける」の基本義には「第一対

象物を第二対象物に接触させて永い間くっつけておく」という概念が含まれている訳ではないが、多義的別義－[3]への意味的な拡張には、「対象物である二つのものを接触させてくっつけること」と「第一対象物である数字・文字などの記号を、筆記物で第二対象物である帳簿に接触させて売上高の印として書き入れて記録として永い間残すこと」――すなわち、「具象物から抽象物への物理的な転換」及び「数字・文字という記号を筆記物を用いて帳簿に接触させることによって書き入れて記録として残すこと」という動作――の間に見出される「空間的な移動」の類似性に基づいたメタファーによって成り立っているものと考えられる。

（21）今夜の飲み代はつけておいてくれ。

における「つける」の概念は、＜暫時飲み代を帳簿につけておくよう頼んで＞＜後で一括して清算すること＞という意味を表現する。この場合の「飲み代をつける」は、多義的別義－[3]からの意味的転用であり多義的別義－[3’]と考えられる。また、

（22）今夜はツケで飲もう。

における「ツケ」とは、「つける」の連用形を名詞化したものであるが、多義的別義－[3’]の表す概念を特殊化転用して多義的別義－[3”]として用いた例である。

3．4．4「つける」の多義的別義－[4]

（23）この子には「桜子」という名前をつけよう。

における「つける」の概念は、＜「桜子」という名前を＞＜新生児に与えることに決める＞という意味特徴によって形成される「抽象的な記号である名前を新生児に与えて、一生その名で呼んで他人と区別することに決める」という概念である。別義[3]の「抽象的な数字・文字を、筆記物を用いて帳簿に接触させて書き入れる」という概念と似ているが、「名前という抽象的な記号をある一人の人間に一生付着させて、その人間と名前とを同位である関係にすることに決めること」とは、意味的に差異があると考えられる。そして、この意味的な拡張には、新生児を「全体」とすれば、「桜子」という名前

は「部分」を表現しているので、「全体―部分」を表すメトニミーの意味関係が関わっている。

３．４．５「つける」の多義的別義－[5]

（24）暗い部屋に入ってから、電灯をつける。

における「つける」の概念は、＜電気のスイッチを入れることによって離れている電線を接触させて＞＜目に見えない電流を流すこと＞という意味特徴によって構成されている「電流を通す」という概念を表す。基本義を支える「二つの対象物を接触させて離れないようにくっつけること」という意味特徴と「断たれている電線を接触させて離れないようにくっつけて電流を通す」の間の空間的な類似性によるメタファーによって、この意味的な拡張が支えられている。

３．４．６「つける」の多義的別義－[6]

（25）鳥インフルエンザが流行している時に、豚丼を売り出すとはいいところに目をつけたね。

における「つける」の概念は、＜自らの視覚を働かせて＞＜ある対象物にぴったりと注目して心を向けること＞という意味特徴によって表現される「心を向ける」という概念である。この意味拡張の場合、第一対象物は「動作主体自らの目」であり、その「目による視線」を第二対象物である「豚丼」にぴったりと密着させて心を向けるという動作を指す。この場合、第一の対象物は「目による視線」であるため、具象物から「視線」という抽象物へと変化している。そして、基本義の表す「二つの対象物をぴったりと接触させて離れないようにくっつける動作」と「目による視線を第二の対象物にぴったりと密着させて心を向ける動作」の類似性によるメタファーが係っていると考えられる。また、「気をつける」の「つける」もこの別義―〔5〕のカテゴリーに属するものと推察される。

３．４．７「つける」の多義的別義－[7]

（26）グローバル化の時代には英語力を身につけることが大切だ。

における「つける」の概念は、＜英語力を＞＜（一生離れさせないように）自分の能力部分に加えること＞という意味特徴を中心的な核に持つ意味構造を持っている。「二つの対象物をぴったりと接触させて離れさせないようにくっつけること」と抽象的な観念である「英語力」を「（一生離れさせないように）自分の能力部分として習得して付け加えること」の間には「全体（自分）―部分（英語の能力）」によるメトニミーが成り立っていて、この意味的な拡張を支えている。

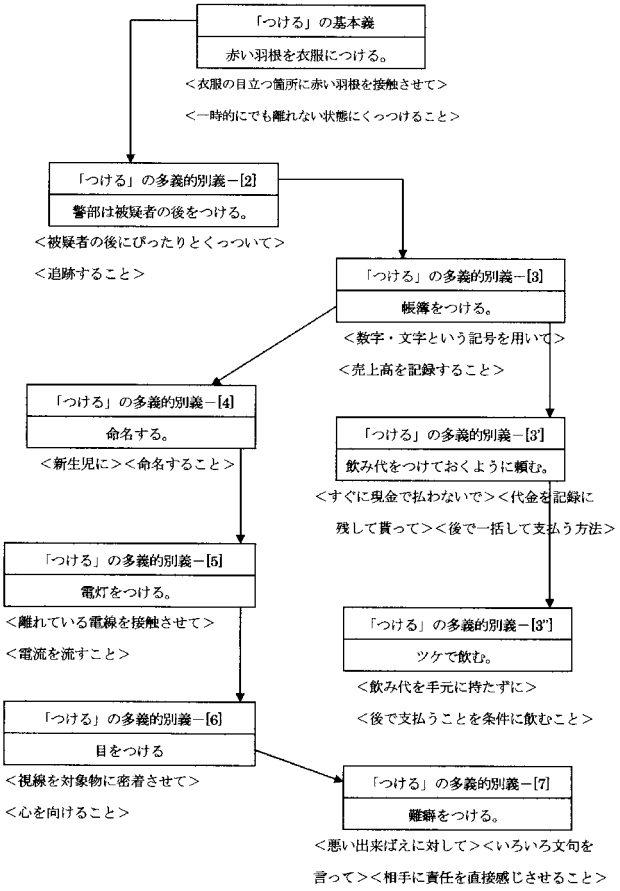
３．４．８「つける」の多義的別義ー[8]

（27）彼の配達が遅れた仕事ぶりに対して、得意先は難癖をつけた。

における「つける」は＜水準より低い出来栄えに対して＞＜いろいろ文句を言って相手に責任を直接的に感じさせること＞という意味特徴によって構成される「いろいろ文句を言って相手に責任を直接的に感じさせること」という概念を表す。「水準より低い出来栄え」と「その結果に対して相手に直接的に責任を感じさせる」ことには、「悪い結果」と「責任を直接的に感じさせる」ということを表現していることになる。この意味的な拡張は基本義を支えるプロトタイプとは共通点が薄いので、「周縁に位置する多義的別義」であると認められよう。

以上、「つける」の基本義からどのように複数の多義的別義が派生したか、そして、その意味的な拡張にはどのような理論的に裏打ちされた意味関係が関わっているのかについて分析・考察した。この明らかにされた結果を踏まえて、「つける」の基本義と新たに派生した複数の多義的別義の間に見出される意味的な関係、及び、新たに派生した複数の多義的別義の相互の間に見出される意味的な関係について分析して得た全体像を、「つける」の複数の多義的な意味を統括するネットワーク・モデル図として[図６]に示す。

「図 6」「つける」の多義性を示す複数の意味を統括するネットワーク・モデル



３．５「つける」を用いた複合動詞に対する考察

「つける」を用いた複合動詞の主なものには、主に下記の四種類の異なるカテゴリーに属するものがある。

A・「つける」に先行する感覚動詞を含めた動詞の動作・行為・状態を第二の対象物により密着させてくっつける作用や心理作用を強調する用法：

（28）　稲の苗木を水田に植え付ける。
（29）　塗料を壁に吹き付けて仕上げる。
（30）　ペンキを塀に塗り付ける。
（31）　家具を作りつけて、固定化させる。
（32）　とれたボタンをシャツに縫い付ける。
（33）　借用書に借用した金額、利子率、返還期日などを書き付ける。
（34）　釘を壁板に打ち付ける。
（35）　喧嘩の相手を地面に叩きつける。
（36）　果し合いの相手に切りつける。
（37）　助手はカンニングをした生徒の名前を先生に言いつける。
（38）　相手に買う気がない物を無理に押しつけて売りつける。
（39）　夫が交通事故で A 病院にいるとの連絡を受けたので駆けつけた。
（40）　彼氏が別の女と歩いているのを見つけた。
（41）　バーゲンがあることを聞きつけた客が、そのデパートに殺到した。
（42）　警部は盗品のありかを嗅ぎ付ける。

B ·「つける」に先行する動詞の動作・行爲・状態をより整えたりまとめたりする動作を強調する用法：
（43）　アップに結った髪が風で乱れたので撫で付ける（44）生糸の値上がりを見込んで、繭を大量に買い付ける。
（45）　花嫁衣裳を着付ける。

C ・先行する動詞の動作・行爲・状態が習慣的なものであることを強調する用法（この場合の「つける」は「慣れる」と交替可能）：
（46）　行きつけているすし屋なら、私の好きなすしをすぐ握

ってくれる。

（47）　食べつけていない食材を使った料理を食べないようにしなさい。

（48）　やりつけていない新規の仕事は、今、引き受けられない。

D・　食材をゆっくり煮たり炒めたりして味を食材によくし
み込ませる作用を強調する用法：

（49）　金平ゴボウを作るにはごぼうを油でよく炒めつけなければいけない。

（50）　夕飯のおかずに筑前煮を煮つける。

4.0 今後の課題

今後の課題としては、「つける」と類義語関係にある語の多義性を分析・考察して、異なる「語」の意味的な面における比較分析をする必要がある。

5.0 まとめ

まとめとして、「つける」の基本義及び多義的別義の間に存在する意味的な相互関係を解析したものを相関図として前頁に図示した。

参考文献

国廣哲彌（1982）『意味論の方法』、大修館書店。

国廣哲彌（1986）「語義研究の問題点―多義語を中心として『日本語学』5－9、明治書院。

国廣哲彌（1997）『理想の国語辞典』、大修館書店、p.226。

国廣哲彌（2006）『理想の国語辞典　II』、大修館書店。

柴田武他編著（1976）『ことばの意味――辞書にかいてないこと』平凡社選書。

鈴木重幸・鈴木康之（1983）『日本語文法・連語論』言語学研究会、むぎ書房。

謝豊地正枝（2005）「中国語における「打」と日本語における「打つ」の表す多義性に対する意味論的比較研究」、日本愛知学院における語彙研究発表会の資料。

巻下吉夫・瀬戸賢一共著、中右実編（1997）『文化と発想とレトリック』、研究社。

籾山洋介（2001）「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明編『認知言語学論考―No.1』、ひつじ書房。

山梨正明編著（2001）『認知言語学論考 ―No.1』ひつじ書房。

ジョージ・レイコフ（Goerge Lakoff）著、池上義彦ら訳（1987年）『認知意味論――言語からみた人間の心』、紀伊国屋書店。

Johnson, Mark.（1987）The Body in the Mind――The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason, University of Chicago Press, Chicago.

Langacker, Ronald W.（1987）Foundations of Cognitive Grammar: Vol.1 Theoretical Prerequisites, and Vol.2 Descriptive Application, Stanford University Press, Ca.Stanford University Press, Ca.

Langacker, Ronald W.（1988）“A View of Linguistic Semantics,”in Brygfuda Rudzka-Ostyn (ed.) Topics in Cognitive Linguistics, Amsterdam, John Benjamins.

Naida, Eugene.(1975)Componental Analysis of Meaning: An Introduction to Semantic Structure, Mouton & Company, N.V., Publishers, The Hague.

Thorndyke, Perry W.(1984) “Applications of Schema Theory in Cognitive Research,” in John Anderson and Stephen Kosslyn (eds.) Tutorials in Learning and Memory: Essays in Honor of Gordon Bower, W.H.Freeman, S.F.

台大日本語文研究第 11 期
2006 年 6 月，頁 91-116
本文 2006.4.30 收稿, 2006.6.15 通過刊登

《每日新聞》中所見 90 年代台灣報導的增減與架構

許均瑞*

摘要

台灣與日本之間的關係，不論是從政治面的衝突或是文化層面的交流來切入，在進入 90 年代之後，由於隨著台灣民主化和中國勢力的崛起，可說是日益複雜。本研究主要是針對日本平面媒體中所呈現的台灣而進行的一連串探討。而本稿則是以日本報紙《每日新聞》中所呈現的台灣新聞報導，以跨越 10 年的資料作歷時性觀察。其中又分別以報導量的增減和版面架構來進行探討。

透過本稿中所設定的假說，利用《每日新聞》所發行的電子資料庫，以台灣做爲檢索關鍵字，我們可以明確的發現若將 90 年代以 1995 年爲基準分成前後期，那麼在《每日新聞》中台灣報導從前期後半開始有顯著的增加。而到了 90 年代後期則呈現前期報導則數的倍數成長。在版面的分布上，也可從最重要版面：第一版中所出現的報導與相關新聞分布版面的分析中發現，台灣不再僅限於國際版的報導與解說，還在 90 年代後期開始逐漸於重要版面的第三版中出現。此點可證明《每日新聞》對於台灣議題的處理，有明顯而且重大的改變。亦即國內觀點與台灣新聞的關連性成爲《每日新聞》所欲盡速傳達給讀者的焦點之一。

關鍵詞：台灣報導、《每日新聞》、90 年代、報導量、版面分布

* 銘傳大學應用日語學系助理教授